

古志地区遺跡分布調査報告書



1988年3月

出雲市教育委員会

古志地区遺跡分布調査報告書

1988年3月

出雲市教育委員会

はじめに

出雲市古志地区は、斐伊川・神戸川治水事業に伴って、今後急速な開発が予想される地域です。

こうしたことから、今年度の国庫補助事業として、古志地区遺跡分布調査を実施しました。

分布調査は、古志地区全域を現地踏査して遺跡地図を作成するほか、これまで発掘調査が行なわれたことのない古志本郷遺跡の範囲確認トレント調査を実施して、貴重な成果を得ることができました。

こうした成果をふまえたうえで、今後の埋蔵文化財保護行政を、さらに進展させていきたいと存じます。

厳しい自然条件のもと、調査にご指導、ご協力を賜わりました関係各位に、厚くお礼申し上げます。

昭和63年3月

出雲市教育委員会

教育長 石 飛 満

例　　言

1. 本書は、出雲市教育委員会が、昭和62年度に、国庫補助事業として実施した古志地区遺跡分布調査の報告書である。
2. 調査は、遺跡分布調査のほか、古志本郷遺跡の範囲確認のための発掘調査を行なった。
3. 発掘調査は、昭和62年11月27日から12月26日まで実施し、遺跡分布調査は、昭和62年9月と昭和63年3月に行なった。
4. 調査体制は次のとおりである。

調査指導者 田中義昭（島根大学法文学部教授）

黒谷達典（出雲市立第二中学校教諭）

ト部吉博（島根県教育委員会文化財保護主事）

調査員 川上 稔（出雲市教育委員会社会教育課主事）

事務局 今岡 清（前出雲市教育委員会社会教育課長）

奥井正之（出雲市教育委員会社会教育課長）

5. 調査にあたっては、土地所有者をはじめ、地元の方々から多大の協力を賜った。特に、広瀬繁信氏には、お世話になった。記して謝意を表します。
6. 本書の執筆、編集は、調査員の手によるが、遺物の整理等には、柳楽敏子、山本信子、松尾陽子の各氏の協力を得た。また、県教委文化課分室の方々には、出土遺物について、ご教示を賜った。
7. 本遺跡の出土遺物は、出雲市教育委員会で保管している。

目　　次

1. 位置と環境	1
2. 調査の概要	3
3. 古志本郷遺跡範囲確認発掘調査	6
4. 遺跡分布調査	27
①遺跡一覧表	
②遺跡地図	
③出土遺物観察表	

1. 位置と環境

出雲市古志地区は、出雲市街地から約2km南西に位置し、神戸川左岸に広がる地域である。旧国道が地区の北を通り、古志橋をすぎると、道路に沿って細長い市街地が形成されている。古志地区は、南北に細長い地域で、その大半が南に広がる丘陵部で占められており、平野部は僅かである。沖積平野にある神戸川の旧自然堤防上は、宅地や畠として土地利用されているが、集落遺跡が存在するところも、また、この旧自然堤防上である。

旧自然堤防上には、古志本郷遺跡が広がっているが、この遺跡は、弥生時代から古墳時代の集落遺跡として知られ、矢野遺跡、天神遺跡、築山遺跡とならぶ、市内でも有数の大遺跡である。これまで、発掘調査をされたことがなく、実態が不明だったが、今回の発掘調査で、大集落遺跡であることが明らかとなった。さらに、西に伸びる旧自然堤防上には、弥生中期を主体とする下古志町田畠遺跡や、奈良時代以降の遺物が多く出土した同町上組遺跡などがある。

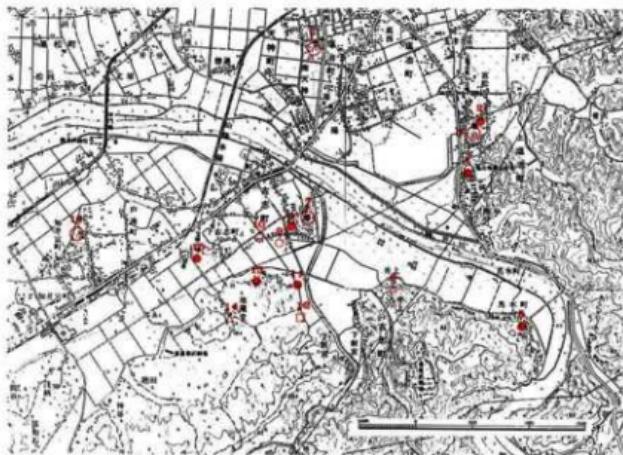


図1 古志地区とその周辺の主要遺跡

1. 天神遺跡
2. 築山古墳
3. 築山遺跡
4. 地蔵山古墳
5. 小坂古墳
6. 井上横穴群
7. 古志本郷遺跡
8. 大梶古墳
9. 古志遺跡
10. 田畠遺跡
11. 放れ山古墳
12. 宇賀池堤跡
13. 妙蓮寺山古墳
14. 地蔵堂横穴群
15. 宝塚古墳
16. 多聞院遺跡

古志地区での遺跡の初現は、他地域よりもやや新しく、弥生中期である。これまで、古志本郷遺跡は、弥生後期以降の複合遺跡といわれてきたが、このたびの範囲確認発掘調査によって、遺跡の上限は、弥生中期にまで遡ることが明らかになった。また、かつては古志本郷貝塚として知られていたように、遺跡の一部には貝塚も含まれ、それは今回の調査でも実証されている。貝塚は、市内では、矢野遺跡、多聞院遺跡が有名であるが、最近、妙見砂丘で、長浜貝塚も発見されている。いずれも、弥生時代から古墳時代の貝塚である。古志本郷遺跡のほかには、弥生時代の遺跡は確認されていないが、下古志町放れ山古墳の北方から石斧が出土した記録もあるので近接して遺跡が存在する可能性もある。

古墳時代になると、平野部に大規模古墳が築かれる。この古墳は、盛土が失われており、規模は明らかではないが、横穴式石室があり、内部から金環などが、出土している。沖積平野の自然堤防上などの微高地にも古墳を築成することは、出雲平野西部の古墳立地の特色で、すぐ西方にも、国指定史跡の宝塚古墳や、天神原古墳（消滅）がある。南の丘陵部には、径5mで円墳の井上古墳や、A～F群で構成される井上横穴群がつくられているが、古い古墳は見当らない。

奈良時代には、「出雲國風土記」に記載された「宇賀地」の堤跡に比定される堤跡が存在する。大部分が宅地や畠として切り崩されているが、南北の両端に、僅かにその痕跡を残している。いまはブロックが積み上げられ、みることはできないが、かつては版築状互層が観察できた。

中世になると、新宮川が開削した谷が、南の山間部から平野に出る通路となっていたので、交通上の要衝地として、浄土寺山城や栗柄城が築かれ、外敵の侵入に備えている。これらは、古志氏の居城として、幾多の戦いの場となっている。浄土寺山が、平野部との比較が小さいのにくらべ、栗柄城は、かなり高いところにある。郭の数はそう多くないが、東斜面と北斜面に認められる。

出雲守護職となった塙治氏（佐々木一族）の頼泰の弟である義信が古志氏を称し、浄土寺山城を築いたといわれている。鎌倉時代以降、12代続いたといわれ、尼子の傘下にあった古志氏も、毛利氏の侵入によって、やがて毛利に降っている。

2. 調査の概要

古志地区遺跡分布調査は、昭和62年度国庫補助事業として、実施した。

調査は、現地踏査による遺跡分布調査を行なったのち、地形図上に遺跡を表示する調査と、弥生時代以降の複合遺跡である古志本郷遺跡の遺跡範囲確認発掘調査である。

遺跡分布調査は、昭和62年9月と昭和63年3月に実施した。9月の調査は平野部と丘陵部西側を実施し、残りの東半分を3月に踏査した。

発掘調査は、斐伊川・神戸川治水事業の進展によって、道路の新設等、開発の及ぶ可能性の大きい古志本郷遺跡を対象にして、昭和62年11月27日から12月26日にかけて実施した。これまで表探でしか窺えなかった本遺跡の実態が発掘調査によって概ね明らかとなつたほか、これまで弥生後期以降の複合遺跡とみなされていたが、弥生中期にまで遡ることが明らかになり、また、遺跡の範囲も、従来よりもかなり範囲が広がることがわかった。遺跡の規模では、市内でも、矢野町矢野遺跡、天神町天神遺跡、上塩治町築山遺跡と肩をならべる大集落遺跡であり、極めて重要な遺跡といえる。

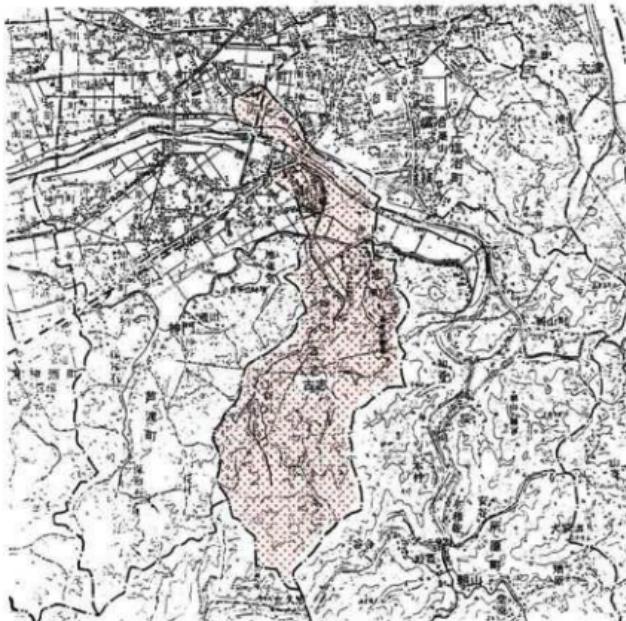


図2 古志地区位置図

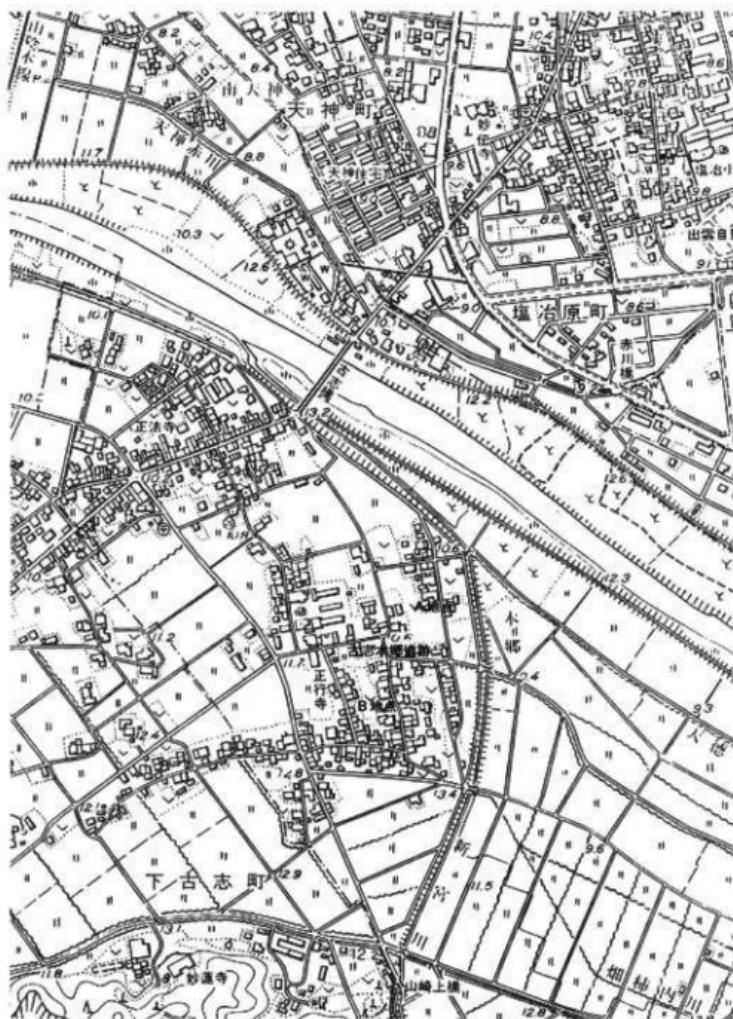


図3 古志本郷遺跡位置図 (A地点・B地点)



図4 A地区（3～6T）トレンチ配置図

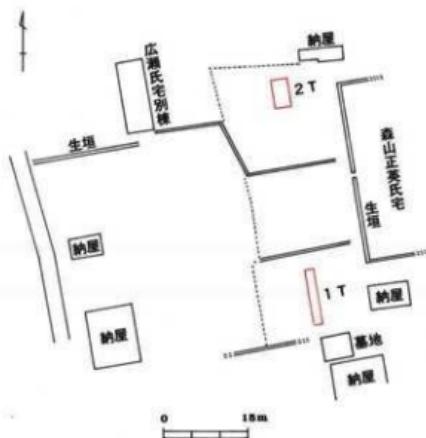


図5 B地区（1～2T）トレンチ配置図

第1トレンチ

遺構

本トレンチは、これまで遺跡の一部とは考えられていなかったB地区の畑地の南端に設定した。先年、島根大学生による踏査で、水晶片などが表採された地点である。トレンチの規模は、 $1.5 \times 10m$ で、南北方向に設定した。

トレンチでの層位は、耕作土（層厚30cm）の下に、明褐色土、暗褐色土、灰褐色土があり、その下は灰白色砂礫層（地山）になっている。A地点にくらべて、表土にかなり粗い小礫が多く含まれているのが、このトレンチの特色である。

検出した遺構は、溝状遺構4条、ピット3のほか、土壙、落ち込み状遺構である。

溝状遺構は、溝4のほかは、浅くて幅の狭いものである。溝4は、幅1.6m、深さ0.4mのほぼ南北方向の溝状遺構である。この溝状遺構は、トレンチ北端で、落ち込み状遺構を切っている。

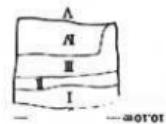


写真1 第1トレンチ発掘前



写真2 第1トレンチ出土遺物

- | | |
|-----|-------|
| I | 褐色土 |
| II | 明褐色土 |
| III | 暗褐色土 |
| IV | 灰褐色土 |
| V | 灰白色砂疊 |



トレンチの南端近くで検出された土壤は、径0.8mくらいであるが、西半分は、トレンチ外となっている。深さは0.3mと浅いが、壇内から頭骨と歯を検出した。北に頭を置いていたが、土壤の深さと方向からみて、当初から埋葬されたままの状態であったかどうかは疑わしい。壇内からの出土遺物はなかった。

落ち込み状造構は、性格は不明だが、弥生土器が出土している。溝4からは、土師器が数片出土したに過ぎない。

遺物

本遺跡の南端にあり、水晶片などが発見されている地点ではあったが、遺物は意外に少なかった。

弥生土器、土師器のほか、数片の須恵器が出土したが、いずれも細片である。弥生土器は、おもに落ち込み状造構内とその周辺で出土している。

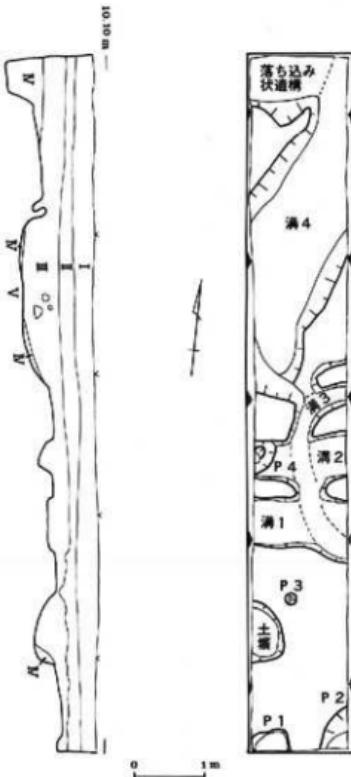


図6 第1トレンチ実測図

第2トレンチ

構造

第1トレンチの北方30mに設定した3×5mの南北方向のトレンチである。この付近は、まわりよりも0.5mくらい低く、雨が降ると集水しやすいという。

トレンチでの層位は、耕作土の下に褐色系統の上層が数層重なり、1mで、灰白色砂礫層（地山）に達する。第1トレンチにくらべて、地山までがやや深い。

検出した遺構は、落ち込み状遺構のほか、土壙、ピット各1である。

落ち込み状遺構は、トレンチ中央やや西寄りから東に向かって傾斜する遺構で、トレンチ東端での表土からの深さは、2.3mをはかる。地山からの深さでも、0.6mはある。傾斜角度は、それほどきつくはない。東端でやや平坦になりそうにはみえるが、溝状遺構とすれば、少なくとも幅4.5mはある大規模な遺構である。東側がトレンチ外にあるため、性格は不明であるが、本遺跡B地区にも、かなりしっかりした遺構があることが判明したことは、大きな収穫であった。なお、この遺構からは、弥生土器が出土している。

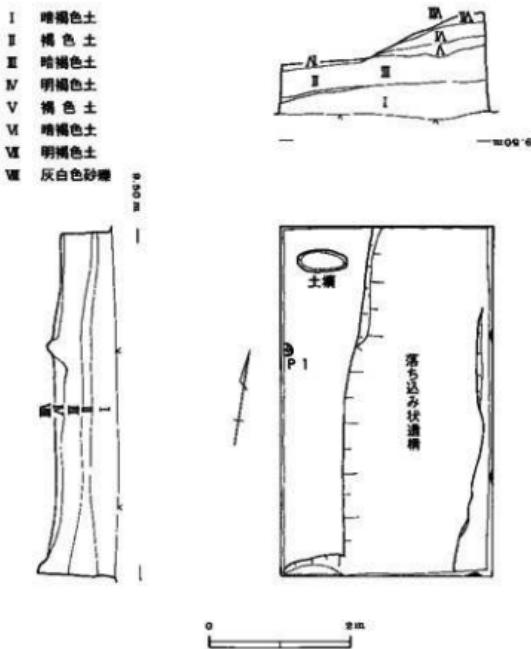


図7 第2トレンチ実測図

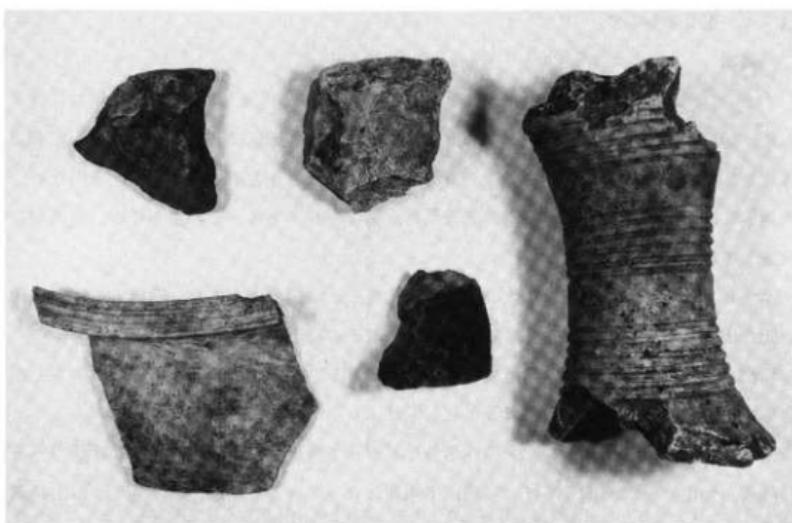


写真3 第2トレンチ出土遺物

遺物

第1トレンチほどではないにせよ、概して遺物は少なく、コンテナ1箱分の量であった。弥生土器と土師器がほとんどで、須恵器や中・近世陶磁器片が微量出土した。いずれも細片で、このことは、第1トレンチと共通している。土器のほかには、砥石と、赤めのう原石が出土している。

弥生土器の器種は、甕、高環などである。高環は脚部片で、5条の凹線を二単位施文している。甕は、口縁部に2~3条の凹線を施したものが、ほとんどである。また、土器片のなかにも、施文に特色のあるものが1片出土している。それは、甕の頸部内側に4~5条の沈線からなる外径2.4cmの同心円状の文様を施している。

土器のほかに、注目すべき遺物として、砥石と赤めのうがある。いずれも、落ち込み状造構内の南側から出土している。この造構からは、ほとんど弥生土器のみが出土しており、同時期の遺物と考えて間違はないと思われる。

砥石は、径5cmの破片であるが、平滑な二面が残っている。赤めのうは、長径4cmの小さなものである。第1トレンチでは水晶片が表採されているし、第2トレンチから弥生時代の造構から砥石と赤めのうが同時に出土したことは、古志本郷遺跡でも攻玉が行なわれていた可能性が高いことを示唆している。

第3トレンチ

遺構

本トレンチは、第1・2トレンチを設定したB地区から、北東に100m離れた畠地に設定した。規模は、 $3 \times 8\text{ m}$ の東西方向のトレンチである。A地区は、これまで、古志本郷貝塚として、古くから知られていたが、遺跡の性格は、ほとんど不明であった。そのため、A地区に、第3～6トレンチを密に配置した。第3トレンチは、そのなかでも、最西端に位置している。

本トレンチでの層序は、耕作土の下に、明褐色土、暗褐色土があり、遺構内には、黒褐色土が広がっていた。また、この層中に、厚さ30cmの混土貝層がある。

検出した遺構は、落ち込み状遺構2のほか、ピット9、溝1である。トレンチの東と西に落ち込み状遺構が検出されたほか、ピットはトレンチ全体にわたって認められた。

落ち込み状遺構1は、トレンチの西半分にわたって検出された規模の大きな遺構である。砂礫層（地山）を30cm掘り下げ、下底は平坦面になっている。西端では一部でシルトに蔽われている。東側の落ち込み面が確認できただけで、南、西、北の三方はトレンチ外にあり、全体の形状、規模は不明である。遺構内からは、多量の土器のほか、貝塚、獸齒、鉄製品などが出土している。

土器は、遺構の全域から出土しているが、特に、P 9の西の貝集積層付近に、 $2 \times 2\text{ m}$



写真4 第3トレンチ（西から）

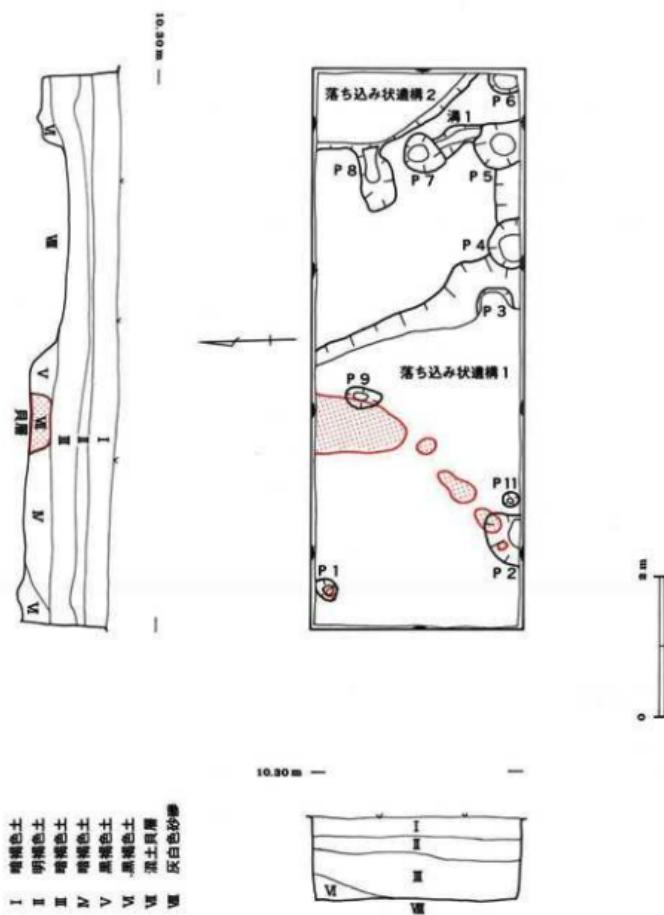


図8 第3トレンチ実測図

の範囲で多量に認められた。土器özりは、厚さ40cmで、弥生中期から古式土師器までの時期の土器片が集積し、比較的大きな破片が多い。弥生中期の土器は、下底から少量出土しただけで、古式土師器が多く出土している。古式土師器は、上層から下底まで認められ、混土貝層の上部から同レベルに特に多かった。土器の出土状態は、投げ捨てたように散乱しており、規則性はなく二次的なものである。

貝の集積は、大小6ヵ所で認められ、トレンチ北壁のものが一番大きく、幅0.8mくらいで、長さはトレンチ外に続いているため、不明である。本遺跡に貝塚があることは、古くから知られていたが、実態が明らかになったのは、本調査がはじめてである。おそらく、本遺跡での貝塚の分布は、落ち込み状遺構などの凹地に投げ捨てたもので、本遺跡全体に広がっていると考えられる。貝の種類は、ほとんどがヤマトシジミで占められ、巻貝と二枚貝が1種類認められたに過ぎない。混土貝層からは、弥生土器と古式土師器の細片が認められ、この時期の貝塚であろう。土器だまりや、貝層の下からは、これに伴う遺構が認められなかった。

落ち込み状遺構2は、落ち込み状遺構1と同じく、地山を30cm掘り込んだ遺構で、下底は平坦である。大部分がトレンチ外のため、全容は不明だが、竪穴式住居跡である可能性が強い。弥生後期の壺が出土しており、当該時期と考えられる。おそらく、落ち込み状遺構1も、同種の遺構であろうが、ピットの位置が揃っていない点が、若干疑問として残る。

遺物

本トレンチからは、他トレンチの総数を上回る遺物が出土している。その多くは、竪穴式住居跡と考えられる落ち込み状遺構1内からの出土である。竪穴式住居が廃棄された後、その凹地に、貝とともに不用となった土器を投げ捨てたものと考えられる。

出土遺物は、土器のほか、貝類、獸齒、鉄製品がある。

土器は、弥生土器、土師器のほか、少量の須恵器、近世陶磁器が出土している。

弥生土器は、弥生中期の壺、甕片が少量出土したほかは、弥生後期の土器である。図9の1~7が弥生土器で、(図9-6)は、かなり肥厚した口縁部をもち、端部に刻目を入れるほか、口唇部には、クシ状工具による4条からなる斜格子を施し、その上部に刻目を入れた貼付突帯をもつ。また、壺(図9-5)は、口縁端部にクシ状工具による4条からなる沈線で鋸歯文を描いている土器で、いずれも中期の土器である。

弥生後期の土器は、ほとんどが甕片である。甕(図9-1)は、口縁部に3条の凹線があり、肩部には刺突文を施している。甕(図9-2)は、短かく外反する口縁をもち、頸部に径2~3mmの貫孔が2穴1単位で1対ある、類例の少ない土器である。また、壺の注



写真5 住居跡（？）

口部も2点（図9-3、4）出土しており、沈線による施文がなされている。そのほか、特徴的な土器では、ミニチュア土器（図9-7）があげられる。僅か1点の出土であるが、落ち込み状遺構1内の下底付近から出土している。器種は壺であるが、頸部から上が欠けていて、本来の形状は不明である。外面には、ヘラミガキがなされていて、丁寧に仕上げられている。

土師器は、数量的に最も多いが、なかでも小谷式の特徴をもつ土器が多い。また、器種では、甕が圧倒的に多い。ほかには、壺、低脚壺、高壺、器台などがある。低脚壺（図10-1・2）は、ほぼ完形に近い土器で、壺部の内外面ともヘラミガキがなされている。出土破片からみて、同器種は、ほかに3～4個体はあったと考えられる。甕（図10-3）は、肩部にクシ状工具による平行沈線文や波状文を施文する土器で、小形のものである。甕（図10-4）は、古式土師器の数多い甕の口縁部のなかでも、異彩を放ち、口縁端部がやや肥厚し、そこに一条の凹線を施した類例のない土器である。数量は少ないが、器台は、大きな破片が多くかった。器台（図10-5）は上台部のみで、脚台が欠けている。器台（図10-6）は、ほぼ完形で、小形ではあるが、均整のとれた土器である。器台（図10-7）は大形だが、部分的に欠損している。

土器のほかでは、歯齒や鉄製品が数点出土している。

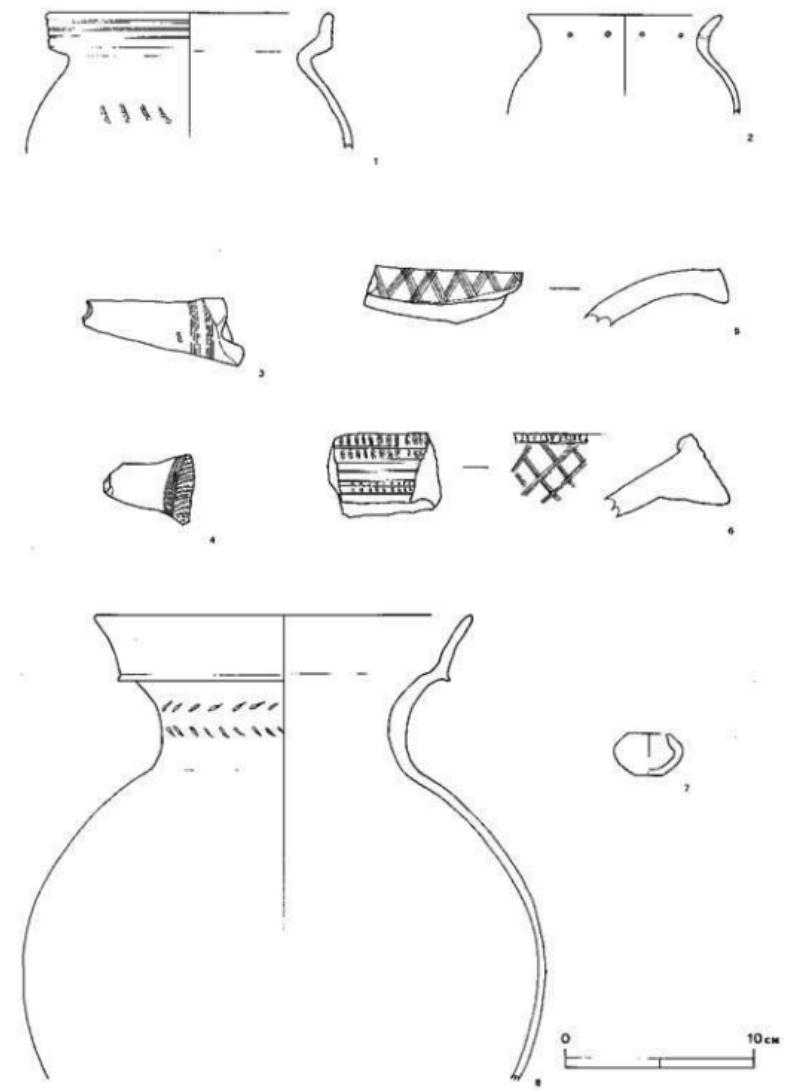


図9 第3トレンチ出土遺物実測図(1)

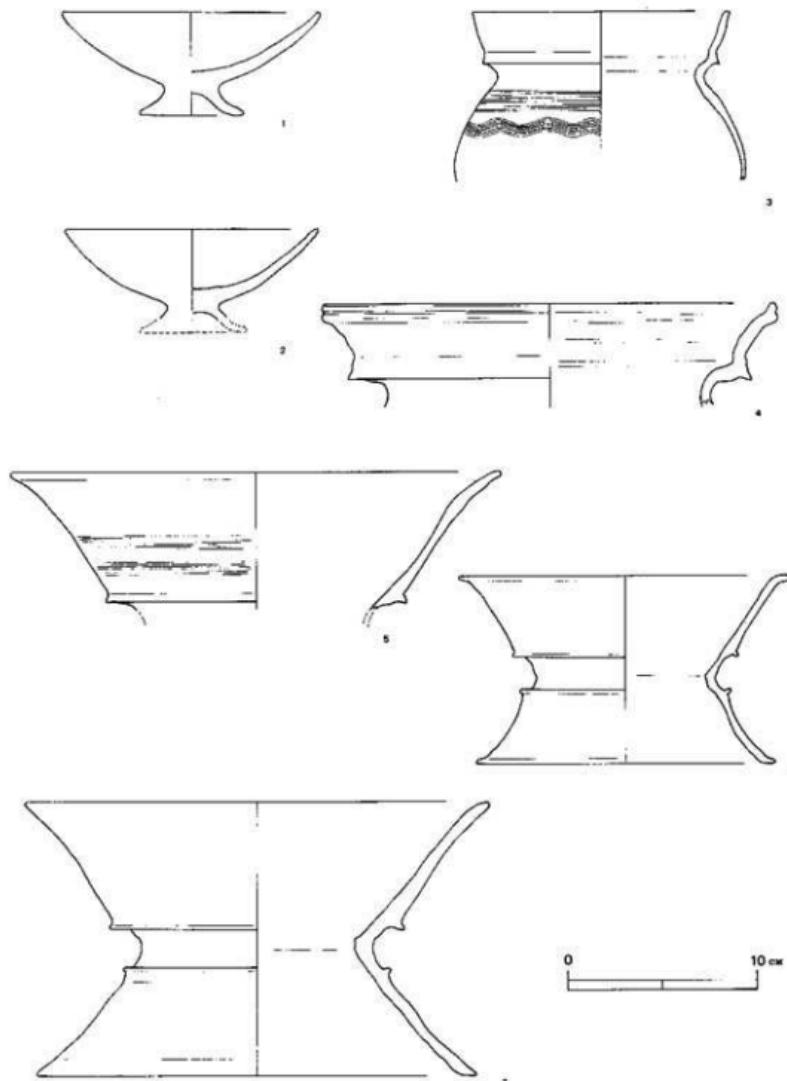


図10 第3トレンチ出土遺物実測図(2)

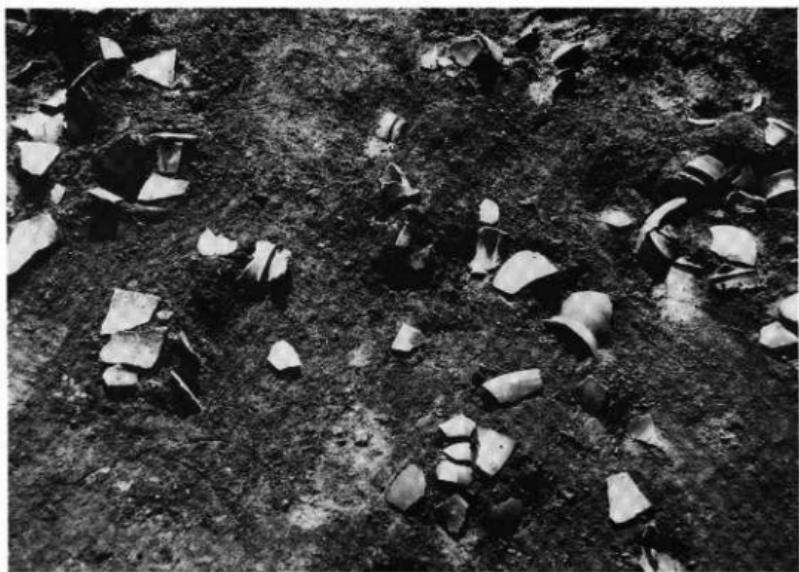


写真6 土器出土状況

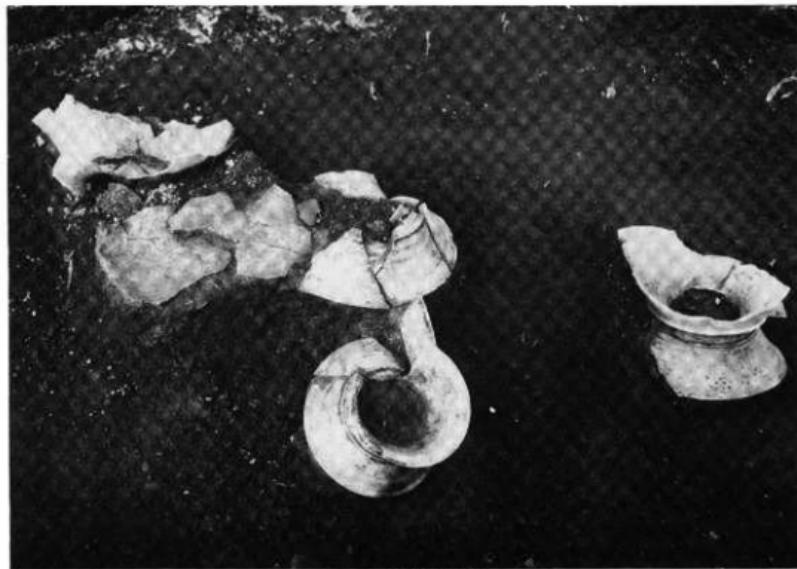


写真7 器台出土状況

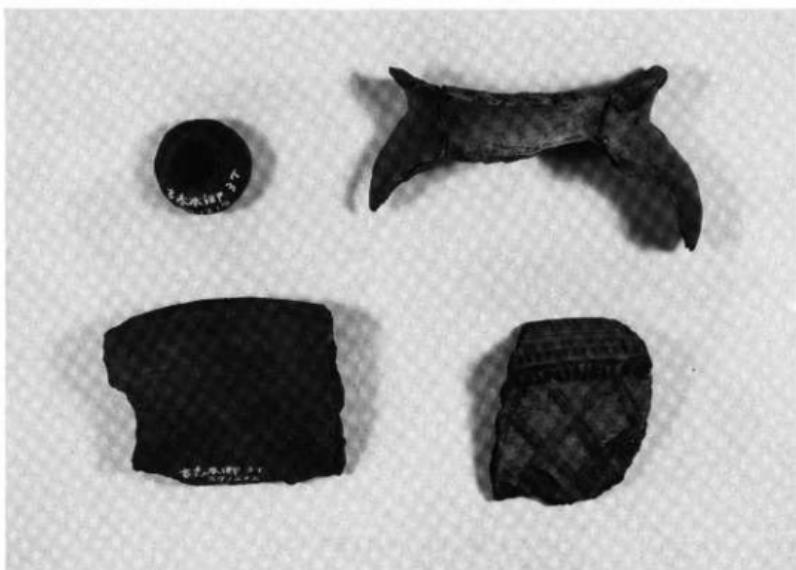


写真8 第3トレンチ出土遺物（弥生土器）

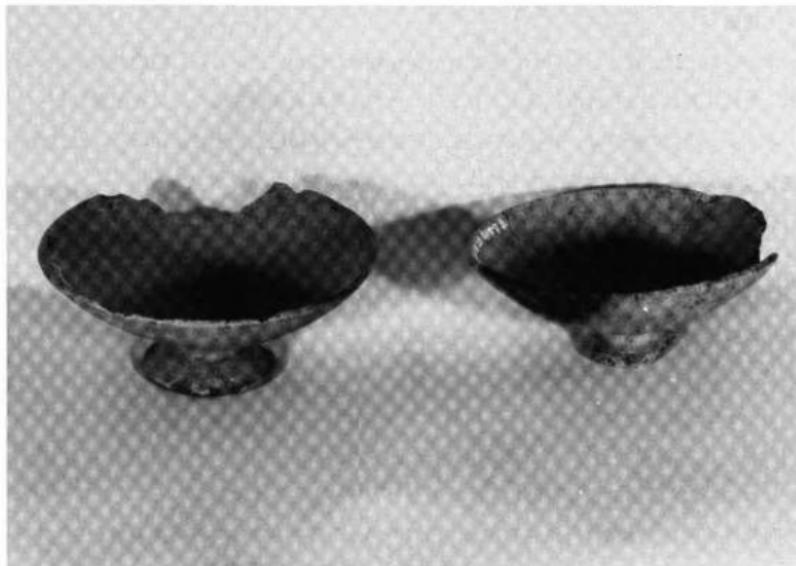


写真9 第3トレンチ出土遺物（低脚環）



写真10 第3トレンチ出土遺物（器台）

第4トレンチ

造構

本トレンチは、第3トレンチから北東へ25m離れた畠地に設定した。空地が広かったため、東西に長い $3 \times 12m$ の、第1～6トレンチでは最も大きい規模のものを配置した。

本トレンチでの層序は、耕作土の下に、暗褐色土、黒褐色土、黒色土があり、灰白色砂礫層（地山）になる。造構上面までは、他のトレンチよりもやや浅い。

検出した造構は、溝状造構4条のほか、土壤4、ピット13、落ち込み状造構1である。このトレンチでも、トレンチの全面にわたって造構が検出された。

溝状造構は、小さい溝が多いが、溝1は、上幅1.4m、下底幅0.2m、深さ0.3～0.5mの溝状造構である。溝内からは、弥生土器が出土している。溝のまわりには多くのピットがあり、これらと、関係があるかも知れない。

ピットは、数多く検出されたが、規則性があるものはない。土壤1は、 $0.8 \times 1.5m$ の長円形を呈し、壇内から骨片が少量検出された。B地区の第1トレンチで検出された土壤と形状が似ており、遺物としては、土師質土器（図12-1）が出土している。中世の土壤基の可能性が強い。土壤は、東側で10cm、西側で20cmの深さしかない浅いものであり、本来は、小さな壇丘があったと考えられる。土壤2は、 $0.9 \times 1.6m$ の長円形を呈し、深さは0.

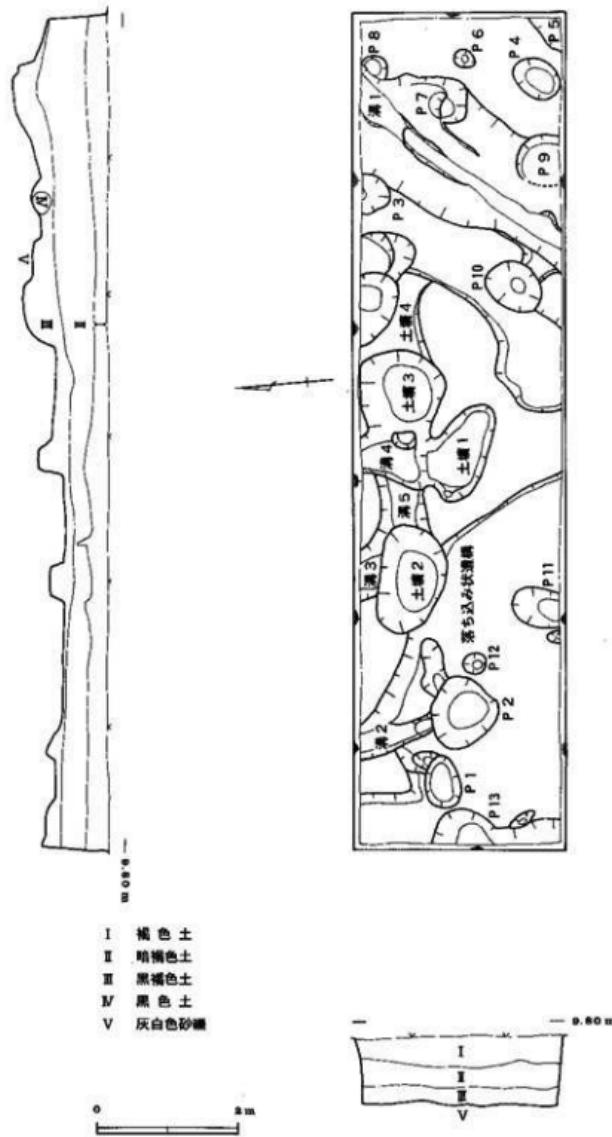


图11 第4トレンチ実測図

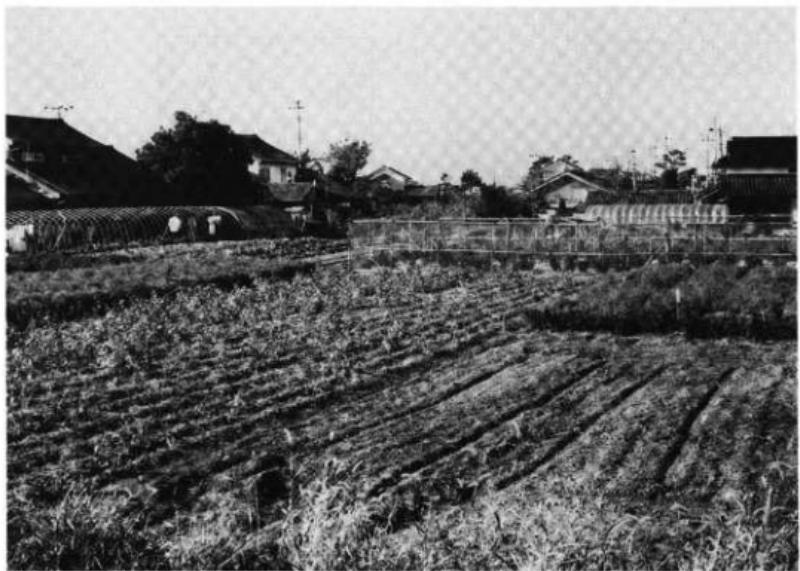


写真11 第4 トレンチ付近（東から）



写真12 第4 トレンチ（西から）

6m ある。壇内から、須恵器の蓋（図12-5）が出土しているので、当該期の土壌と考えられる。土壌 3 は、径0.9m の円形土壙で、深さは0.8m である。土壙の中層から唐津系の高台付皿が出土したほかには、遺物はなかった。皿も、下底から出土していないために、この土壙に伴うものかどうか、土層状態からは明確にしがたい。土壙はトレーンチ外にかかるため、大きさはよくわからないが、径1m くらいの土壙である。深さは0.7m あり、土壙 2、土壙 3 と同様、深い土壙である。壇内からの出土遺物はなく、時期は不明である。

遺物

第4トレーンチからは、他のトレーンチとくらべると、やや須恵器の出土が多かった。大きな破片は少なかったが、全体でコンテナ2箱分ある。出土遺物は、土器のほかには砥石がある。

土師質土器（図12-1）は、底部に回転糸切り痕を残す土器である。高環（図12-2）は、外面を赤色塗装した土師器である。砥石（図12-3）は、破片だが、表裏二面を平滑面とし、一方の側面を、上幅0.5~1cm、深さ0.5cmのU字形溝断面の筋砥石として使用し

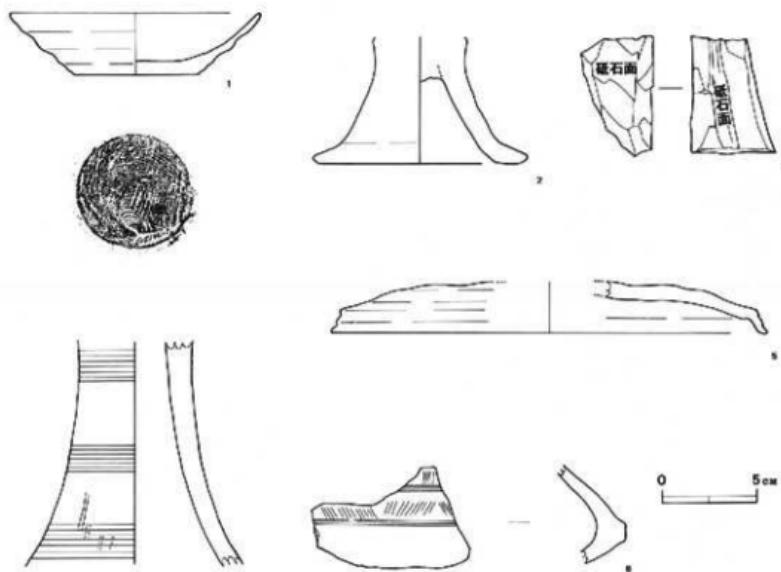


図12 第4トレーンチ出土遺物実測図

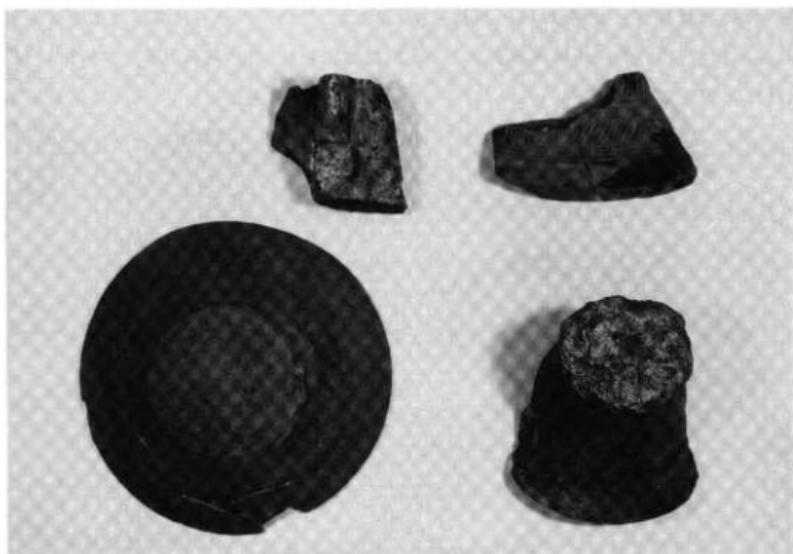


写真13 第4トレンチ出土遺物

ている。もう一方の側面は欠けていて、砥石面があったかどうかは不明である。高坏（図11-4）は、多条の沈線で施文された脚部片である。蓋（図12-5）は、須恵器で、口径23cmの大形品である。壺（図12-6）は、胴部片であろう。

第5トレンチ

遺構

本トレンチは、第4トレンチのすぐ北隣の畠に設定した、 $3 \times 8\text{ m}$ の南北に長いトレンチである。本遺跡に配置したトレンチのなかでは、最も北に位置している。遺跡での遺物散布地域は、さらに北にも広がっているが、空地がなかったために現位置を選んでいる。

本トレンチでの層序は、耕作土の下に、黒褐色土、暗褐色土、明褐色土があり、灰白色砂礫層（地山）に続いている。

検出した遺構は、上面での畝跡のほか、溝状遺構4条、土壤6、ピット11である。遺構は、トレンチ全面にわたっており、遺物からみて、他トレンチよりも比較的新しい時期の遺構が多い。

畝跡と考えられる遺構は、地表から60cmの深さで、幅0.5m幅に踏み固められた面が十字状に検出されたものである。おそらく、畝の境の小路であろうが、その下から青磁などの

中世の遺物が出土しているので、中世～近世の遺構であろう。

溝状遺構は、トレンチで知る限りでは、溝4が最も長い。幅0.6m、長さ7m、深さ0.2mの遺構で、南北方向に伸び、トレンチ外に続いている。溝のなかでは、最も新しい時期

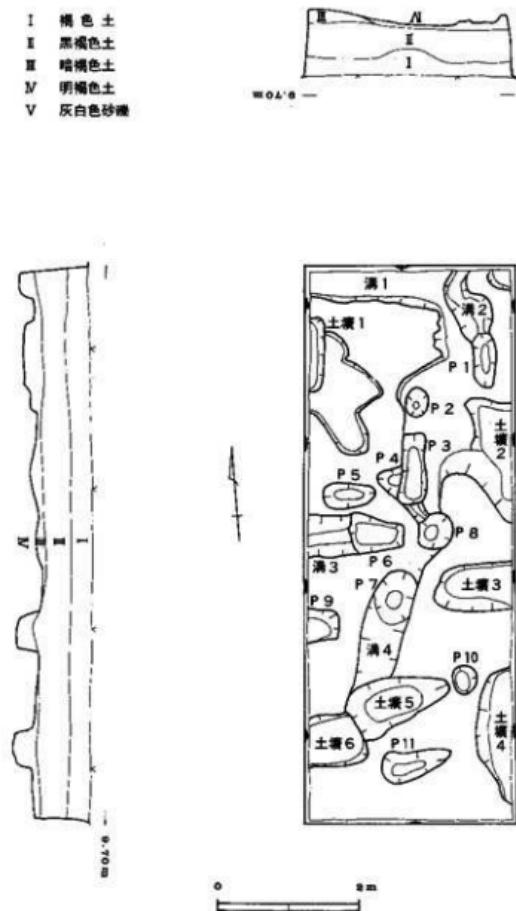


図13 第5トレンチ実測図



写真14 第5トレンチ（北から）

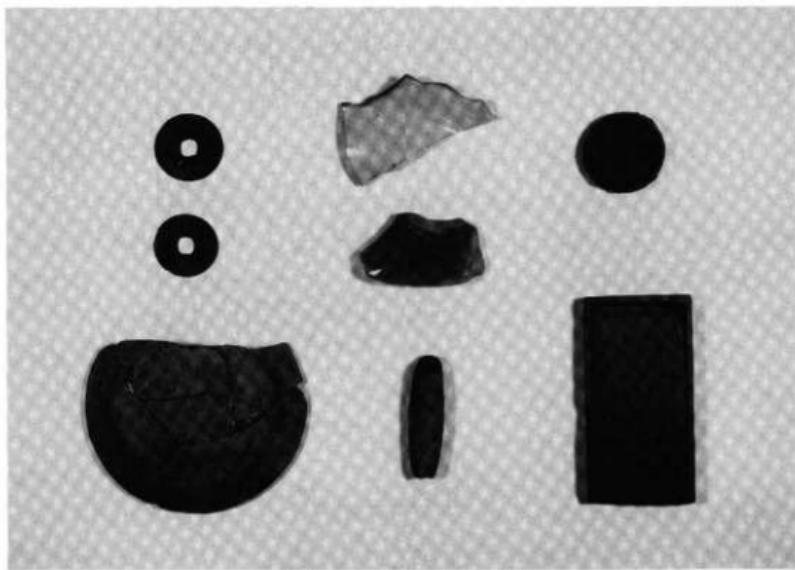


写真15 第5トレンチ出土遺物

の遺構である。他の溝は、ほとんどトレンチ外のため、不詳である。

土壤は、壇内からの出土遺物が少なく、時期がわかるものは少ない。土壤3～6は、深い遺構だが、性格は不明である。土壤5からは、土壤の中層から近世の小さな硯が出土している。

ピットは、数多く検出されたが、建物跡を窺わせるものは見当らない。ピット内からの出土遺物はほとんどなく、時期を確定しがたい。

遺物

本トレンチからは、他トレンチよりも比較的新しい時期の遺物が出土している。しかし、遺構に伴うものは少ない。コンテナ1箱分の出土遺物があったが、ほとんどが土器である。

土器は、細片がほとんどだが、特徴的なものでは、青磁片と青白磁片（皿）があった。土器以外では、新しい時期の遺物が多い。硯は、近世にみられるもので、小形の遺物である。完形品であり、土壤5の中ほどの深さから、裏を上にして出土した。短辺3.9cm、長辺7.6cmの長方形を呈する。管状土錐は、トレンチ中央で出土している。長さ4.5cmで、中央に径0.4cmの孔が貫通している。時期は特定できない。また、飾金具と考えられる遺物も1点出土している。これは、青銅製で、径3cmの内弯した面に文様を施し、裏は、0.3cmの方形の棒状突起物がついている。おそらく、柱などに打ち込んでいたものと考えられる。古錢は、二点出土しているが、表面が磨耗しているため、判読しがたい。

第6トレンチ

遺構

本トレンチは、第4トレンチの南、山根馨氏宅の裏の畠に設定したトレンチである。トレンチの規模は、2×5mで、本調査のトレンチでは最小のトレンチである。当初、当該地から、山根馨氏所蔵の磨製扁平片刃石斧が出土したと聞いていたが、山根馨氏宅内からかって出土したものであることがあとでわかった。

検出した遺構は、溝状遺構のほか、土壤2、ピット5である。このトレンチでも、他トレンチと同様、トレンチ全域から遺構が検出されたが、遺構の重複がみられない点が特徴である。溝は、トレンチ北端に、0.5m幅で、長さ3mが認められたが、トレンチ外に伸び

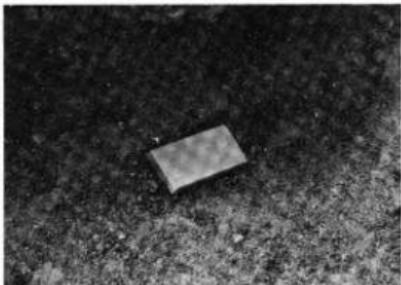


写真16 砥出土状況

- I 棕色土
II 喀褐色土
III 黑褐色土
IV 灰白色砂礫

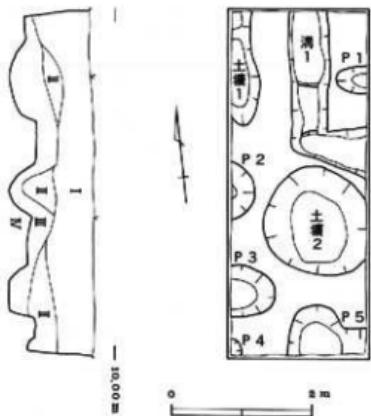
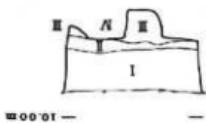


図14 第6トレンチ実測図

ている。土壤は、特に土壤2がしっかりしており、径1.6mの円形を呈し、深さは、0.55mもある。この土壤内からは、遺物は出土していない。ピットは、P3とP5が大きく深い。P3とP4からは、弥生後期の甕の口縁部が出土している。P5からは、須恵器の高台付坏片や土師器が認められた。

遺物

本トレンチでの出土遺物は、コンテナ半箱分しかない。土器片のほかには、鉄製品1点、青銅製品2点がある。

土器は、細片がほとんどで、大形破片は須恵器ぐらいである。須恵器の蓋は、径20cmの大きなもので、中央に宝珠状のつまみがある。奈良時代の蓋である。また、高台付の坏や皿があり、これらも蓋と同時期であろう。これらの遺物は、P5の上面から出土しており、本トレンチでの出土量のうち、かなりの部分を占める。青銅製品は、方形の孔のあいた径2cmの円形を呈するもので、用途は不明である。鉄製品は棒状品であるが、1点出土している。

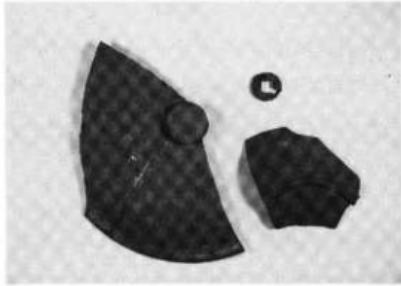


写真17 第6トレンチ出土遺物

古志地区遺跡一覧表

番号	種別	名称	備考
1	集落跡	古志本郷遺跡	神戸川の旧自然堤防上の畠地に立地する。弥生中期以降の大複合遺跡であり、市内でも、矢野遺跡、天神遺跡、築山遺跡とならぶ大集落跡である。一部に貝塚もある。
2	散布地	思案橋北遺跡	古志本郷遺跡から西へ伸びる旧自然堤防上に立地する古墳時代以降の遺物散布地である。すぐ西には、弥生時代の遺物散布地である田畠遺跡がある。
3	散布地	思案橋南遺跡	表探では、須恵器片を2片発見した。
4	古墳	大梶古墳	旧自然堤防の南に広がる水田で、用水路工事の際に古瓦が発見されている。
5	古墳	宇賀池堤跡	表探では、須恵器片1片を発見した。
6	古墳	井上古墳	旧自然堤防上に立地する古墳時代後期末の古墳である。宅地内にあり、盛土を失った横穴式石室が露出している。
7	池堤跡	宇賀池堤跡	かって、盛土を崩して東の畠に撒いたといわれ、円筒埴輪片が散見できる。
8	古墳	井上古墳	『出雲國風土記』に記載されている「宇賀池」の旧堤跡である。
9	古墳	井上古墳	いまは一部を留めているに過ぎないが、かって観察できた堤の土層断面で、版築状互層が確認されている。
10	古墳	井上古墳	井上の丘陵先端部に立地する。
11	古墳	井上古墳	径5mの円墳で、すぐ下には横穴群がある。

番号	種別	名 称	備 考
7	横穴群	井上横穴群	井上地区に集中するA～F群からなる横穴群である。市内でも上塩治、神門地区とならぶ三大密集地域の一つである。
8	中世城館	栗柄城跡	久奈子神社のある丘陵に築かれた古志氏の居城で、多くの郭や堀切が残っている。 この地は、備後からの通路があり、交通の要衝である。



写真18 大槻古墳石室（北から）



写真19 古瓦出土地（水路内）



写真20 字賀池堤跡（西から）



写真21 かつて神門塚があったと伝えられるところ
(中央の墓地付近)

凡 例

1. 遺跡地図は、古志地区を3区分している。
2. 遺跡地図①~③は、1万分の1地形図を使用し、③だけは3分の2に縮小している。
3. 図中の記号は、次による。

○ 遺跡・散布地

● 古墳

横穴群

△ 中世城館

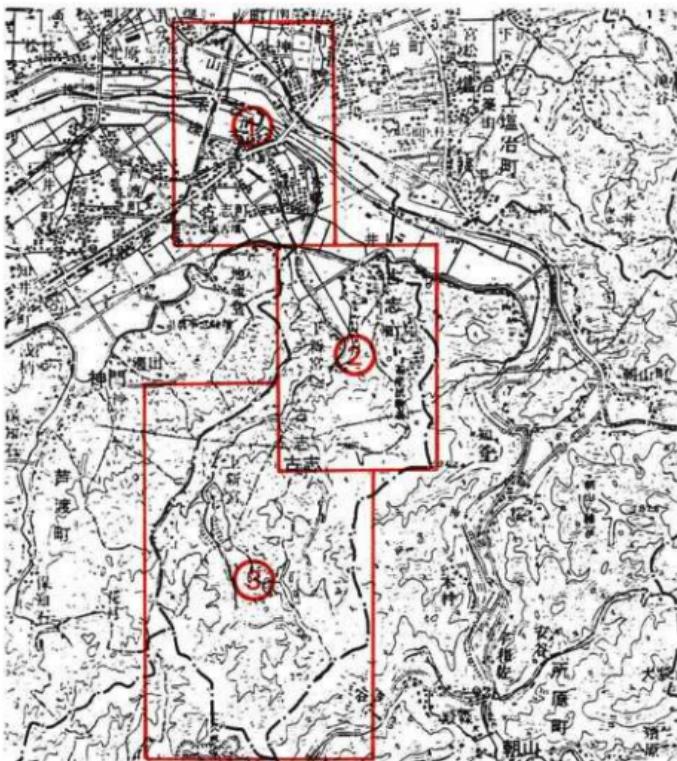


図15 遺跡地図区分図

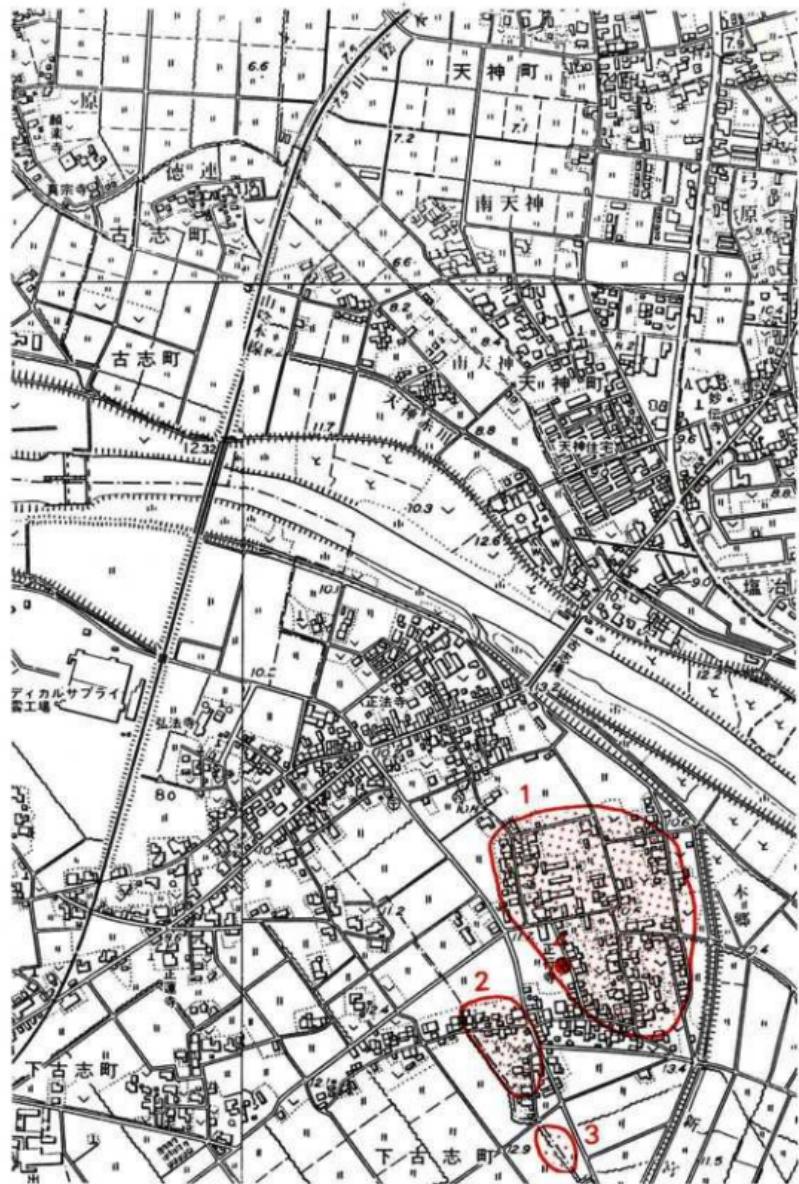


図16 遺路地図①



図17 遺跡地図②



図18 遺跡地図③

遺跡分布調査 出土遺物観察表

拂出番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底径	高さ					
9-1	甕	14.5	—	—	丸かい複合口縁部に、ヘラ状工具で3条の凹線を施す。 内面は、頸部までヘラケズリ。	淡褐色	密	良	
2	甕	10.3	—	—	細く外反する丸かい口縁部をもつ。 颈部には、3mmの貫孔が2孔を1単位として1対ある。 内面は、頸部までヘラケズリ。	淡褐色	普通	良	
3	甕	—	—	—	基部付近に、クシ状工具による4条を1単位とする沈織が、2単位施されている。 基部から先端部にかけて、ヘラケズリがなされている。	淡褐色	密	良	注口部
4	甕	—	—	—	基部付近にヘラ状工具により沈織文で施文されている。 基部から先端部にかけてヘラケズリがなされている。	褐 色	密	良	注口部
5	甕	—	—	—	大きく外反する口縁部で、やや肥厚している。 口縁部には、クシ状工具により粗い4条1単位の沈織で鋸歯文を施文している。 一定方向の平行沈織を描いたのち、別方向の平行沈織を施して鋸歯文を形成している。 内面はハケメを施す。	灰褐色	密	良	
6	甕	—	—	—	大きく外反し、かなり肥厚した口縁部をもつ。 口縁部は6条の平行沈織で区画し、沈織間に刻目を入れている。 口脣部は、端部に刻目を入れた貼付突部をもち、その下を4条を1単位とする平行沈織で斜格子文を描いている。	灰褐色	密	良	
7	甕	—	—	—	頸部がかなり張る甕で、頸部から上を欠いている。 体部外表面はヘラミガキを施す。	淡褐色	密	良	ミニチュア 土器
8	甕	20.0	—	—	ゆるく外反する複合口縁をもち、その下端を外側へ突出させている。 直立させた長い頸部をもち、ヘラ状工具によるハ状刻文を描出している。球状の頸部には、細かいハケメを施す。 内面は肩までナテ仕上げ。	淡褐色	密	良	
10-1	低脚甕	13.5	5.5	5.5	内外面ともヘラミガキを施す。 环部は、ゆるく内寄して立ち上がる。 ほぼ完形品。	淡褐色	密	良	
2	低脚甕	13.5	(5.5)	5.5	内外面とも、ハケメ調整ののち、ヘラミガキを施す。 环部は、ゆるく内寄して立ち上がる。 ほぼ完形品。	淡褐色	密	良	

標例番号	器種	法 量 (cm)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		上径	底径	高					
10-3	甕	13.6	—	—	ゆるく外反する複合口縁をもち、その下端を外側へ突出させている。 体部肩には、クシ状工具による平行沈線と、その下に波状文を施している。	暗褐色	密	良	
4	甕	23.6	—	—	大きく外反する場合口縁の端部をやや肥厚させ、1条の凹線を施している。 また、下端を軽く突出させている。	淡褐色	密	良	
5	器台	26.0	—	—	上台部のみで、脚台を欠いている。 内面はヘラミガキで仕上げている。 外面は、クシ状工具による平行沈線を施す。	淡褐色	密	良	
6	器台	17.8	15.6	10.0	上台部、脚台部の口縁端部を短く外反させている。 上台部の内面は、ヘラミガキを施している。	淡褐色	密	良	
7	器台	24.5	23.2	14.5	外反する上台部、脚台部の口縁端部は、あまり屈曲しない。 上台部の内面は、ヘラミガキを施す。	淡褐色	密	良	
12-1	坏	13.4	6.0	3.3	立ち上がりは、ほぼ直線状である。 底部は、回紙糸切り後、無調整、ほぼ完形品。	褐 色	密	良	
2	高坏	—	11.4	—	脚部のみで、押部を欠いている。 脚部上部には、タテ方向のヘラケズリ痕がある。 外面には、全面に赤色塗彩を施す。	赤褐色	密	良	
3	砾石	—	—	—	表裏二面を平砥石とし、側面を筋砥石として使用している。	灰褐色	—	—	
4	高坏	—	—	—	脚部のみで、下端を欠いている。 7条を1単位とする平行沈線文を3cmおきに3列施文している。	淡褐色	密	良	
5	蓋	23.0	—	—	口縁端部を鋭く外反気味に屈曲させている。 口径が大きく、高さが低い。	青灰色	密	良	
6	蓋	—	—	—	脚部の破片。 4条を1単位とする平行沈線を1.5cm間隔で描き、その間を斜行平行沈線で埋めている。 斜行平行沈線は、11条ごとに方向をかえ、交互にしている。	淡褐色	密	良	

昭和63年3月25日 印刷

昭和63年3月30日 発行

古志地区遺跡分布調査報告書

発行 出雲市教育委員会

印刷 伊藤印刷